

強者の国語・〔現代文・解答編〕

いかがだったでしょうか。典型的な「言語」や「記号学」に関する内容でしたが、それらの背景知識が身につけていないとやや読みにくかったかも知れません。また内容自体はある程度理解できていても、本文の言葉をただ「抜き出し」て並べるだけでは日本語として不自然で意味が取りにくい答えになっています。「強者」を目指す皆さんは、「自分の言葉」で説明する練習も意識しましょう。

〈解答〉

問一 「こころ」という和語が歴史的に「意味」を含意してきたことや、語を人間とのアナロジーで捉える観点を踏まえると、意味論によって切り離されて理解されてきた語の意味と人間の心は切り離せないものとして理解できるということ。

問二 言語主体とは無関係に成立しているように見える自然界も、実際は言語の構造という既成の論拠に基づいて、無限の連続である外界を、恣意的で有限な類概念に分節することで、人間の知覚が整理され、一定の秩序と形態を与えられたものに過ぎないということ。

問三 言語とは、話者の経験を意味のある有限の範疇に強制的に分類するものであるため、感情を表す言葉を与えられることにより、漠然とした感情が言葉につられて明確化されるということ。

問四 意味論は、言葉の意味を客観的認識の対象として人間の心情から切り離してきたが、言葉が人間の心情を規定したり、人間が自らの心情に合致する言葉を探し求めることで言意味が変化していくように、人間の心情と言葉の意味が相互に影響することを認識し、両者を関連させて理解しようとする学問とならない限り、人間を理解しようとする学問として価値を持ち得ないから。

〈解説〉

問一 傍線部の説明問題だが、傍線部自体よりもむしろ本文にある「語と人間とのアナロジー」や従来の「意味論」批判を正確に理解できたかどうかが重要である。

まず、冒頭の2〜3段落の記述から、

○人間 「からだ」 + 「ころ」 || 「身」
⇔ ⇔ ⇔ (アナロジー)

○言語 「音声形式」 + 「意味」 || 「語」

という図式を読み取る。言語の方の図式からは、

○記号 「シニフィアン」 + 「シニフィエ」 || 「シーニユ」
(意味するもの) (意味されるもの) (記号)

という記号学の基本的な図式を思い出しておこう。

次に、傍線部直前の段落の記述から、「ころ」という和語が、「意味」という漢語が表す概念（ややこしいが、「意味」という

言葉の意味)を含蓄してきたことを押さえる。古文単語として「こころ」に「意味」という訳があることを知っていれば理解が早まるかもしれない。

最後に、傍線部直前から、言語に関する「意味論」によって、言語の「意味」が「言語主体」から切り離されてきたとの内容を押さえる。

問二 傍線部前後の記述は、頻出の背景知識である記号学・記号論の「言語的分節」を知っていれば、理解は易しい。また、キーワー

ドである「分節」の説明として「言語の構造という既成の論拠の上において」「無限の連続である外界を、いくつかの類概念に区切」という内容も指摘しやすいだろう。

あとは傍線部の「客観的に見える」「客観的に分割されていない」の言い換えだが、安易な「主観的に分割されている」という解答は避けた方がよい。「主観的」では、「言語主体である個人の意志や考え」というニュアンスが含蓄されてしまうが、ここでポイントは「習慣的・恣意的な言語的分節に相対的(言語が違えば分割の仕方も異なる)」という点であり、「主観的」とはズレる。「日本語の枠組みに従った分節」が「主観的な分節」と異なることは理解できるだろう。これは傍線部の次の段落の「言語が言語主体を追い込む・特定の分類を強制する」ということから理解できる。厳密に説明するならば、「客観的」とは言えないが「主観的」とも言えない言語(文化的な約束事は客観的とも主観的とも言いがたい)によって、人間の主観的な感覚が整理・強制されて外的世界が成立する、という説明になるが、ここまで書く必要はないだろう。なお、「言語の恣意性(言語はある種の約束事である)」も頻出の背景知識である。先の「言語的分節」とセットで理解したい。

強者の戦略

問三

まず、傍線部の「その言葉」(Ⅱ「愛」とか『嫉妬』とか『憎悪』とかいう言葉)、
「愛や嫉妬や憎悪」を抽象化してまとめる。
「感情を表す言葉」「感情」くらいが無難である。また、「言葉とともに」とあるが、
ここでは「言葉を与えられると、感情がその言葉につられて／言葉の意味に強制され」と言い換える。

次に、「結晶してくる」という比喻を説明する。「結晶する」とは、「(積み重ねた努力などが)一つの形をとってあらわれること」であるが、ここでは「漠然とした・もやもやした感情が明確化されること／明確な感情として認識されること」と理解しよう。

ここまでで傍線部は、

「感情を表す言葉を与えられることにより、漠然とした感情が言葉につられて明確化される。」

と言い換えられる。後はこれに「理由」を書き加える。本文根拠としては傍線部の一つ前の段落をまとめ、

「言語とは、話者の経験を意味のある有限の範疇に強制的に分類するものであるため」

といった内容を解答に加えよう。

問四

まず、傍線部の「意味論」・「人間の『こころ』と『こころ』の学」・「人間の学としての『意味』」を説明すると考える。

「意味論」は傍線部（1）直前にある通り、「意味を客観的認識の対象として、当の言語主体から切り離しすぎた」点を指摘すればよい。

「人間の『こころ』と『こころ』の学」については、まず「相互関係」について、傍線部（4）の前の段落から傍線部（4）にかけての記述を踏まえ、「言葉の意味が人間の心的活動に影響」＋「人間の心的活動が言葉の意味に影響」という双方向を説明する。問四に「全体の要約」としての側面があることに気がつければ、それぞれをより具体的に説明する必要がわかるはずだ。それぞれ、本文を「言葉の意味により人間の心情が規定される」、「人間の心情に合致する言葉を探し求めることで言葉の意味が変化する」くらいにまとめればよい。次に、『こころ』の学」について、傍線部（1）前後にある通り、本文における「こころ」が「人間の心的活動」と「言葉の意味」の二つの意味を同じ語で表す点に注意すれば、「人間の心的活動と言葉の意味を関連させて理解する学問」くらいの意味がとれるだろう。

「人間の学としての『意味』」については、ここでの「意味」が「言葉の意味」とは別のものである点に注意して、「人間を理解しようとする学問としての価値」くらいに言い換えられればよい。

最後に、「言語主体・人間」、「感情・心情・心的活動」など同内容の言葉を適宜整理するとよい。